

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

平成 25 年 1 月 7 日作成

派遣生基本情報

氏名：小椋 彩

所属先：スラヴ語スラヴ文学研究室

派遣形態：平成 23 年度冬個人派遣・PD

研究課題

亡命ロシア研究：アレクセイ・レーミゾフ「猿類大自由院」とパリ

派遣先での活動

(1) 派遣先基本情報

派遣国・都市

ロシア（サンクト・ペテルブルグ）

利用した研究機関

ロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所（プーシキン館）、国立図書館、国立演劇博物館
図書館

(2) 派遣期間

平成 24 年 7 月 27 日～9 月 30 日（66 日間）

研究成果

(1) 概要

ソ連時代に黙殺されていた作家アレクセイ・レーミゾフについて、昨今、文学作品のみならず、画業にも大きな関心が集まっている。レーミゾフの画業は、レーミゾフが 20 世紀初頭に組織した疑似秘密結社組織（猿類大自由院）の活動と密接に関連しており、画業研究にはこの組織の検討が不可欠である。本研究における渡航・滞在の主要な目的は、猿類大自由院関連の資料収集および検討であり、これらの資料を通じて、レーミゾフのみならず、亡命者たちの活動の詳細についても明らかにすることである。

(2) 達成された成果

8月にはロシア国立図書館手稿部にて、1900年代初めから晩年に至る手紙、絵入りアルバム、写真等、貴重な資料を多数閲覧した。絵入りアルバムに関しては閲覧が許されたのみだったが、「図」でなく「文字」であれば、ほとんどをコピーできたため、レーミゾフのカリグラフィー研究にとっての大きな収穫となった。加えて国立演劇博物館手稿部で、1900年代の戯曲の草稿を閲覧した。

9月にはロシア文学研究所手稿部にて、おもに亡命後の書簡や絵入りアルバムの閲覧を行った。ここでは国立図書館以上に視覚芸術作品のコピーが厳しく制限されていたが、だからこそ、貴重なオリジナルを多数所蔵する研究所にて現物を見られたことはきわめて有意義な経験だった。

滞在を通して、レーミゾフ研究の第一人者でロシア文学研究所に所属するアラ・グラチョワ博士から、直接のアドバイスを受けた。また、同研究所からの推薦状のおかげで、国立図書館手稿部、国立演劇博物館手稿部での調査が非常にスムーズに進んだ。

(3) 今後の展望

今回の調査結果をもとに、2013年秋の日本ロシア文学会にて研究報告を行い、その後、論文を投稿する予定である。

なお、レーミゾフの視覚芸術研究を進めるにあたって、まだほとんど研究の蓄積のないレーミゾフのカリグラフィー研究にも力を入れていくつもりである。

今後は、亡命文化研究というより広い文脈での貢献ができるよう、一層努力していきたい。